「大黒札」、「裏白二百円」、他にも通称を持つ

― 通称

これまでに「裏白二百円」、「横二十円」、「縦二十円」など、通称を持つ日本銀行券が登場しました。ここでは、通称で親しまれている日本銀行券を紹介します。

まずは、「分銅五円」の通称で親しまれている「改造五円券（菅原道真（すがわらのみちざね）像）」（1888年<明治21年>）です。このお札の呼称は、表面に重さを秤る分銅の形が描かれているほか、地紋にも小さな分銅が描かれていることに由来します。このお札は、1886年（明治19年）に発行された「旧五円券（大黒天像）」（通称「大黒札」の1つ）の改良(注)を目的に発行された改造券で、初めて歴史上の人物像を採用した日本銀行券です。なお、大黒札には、旧五円券のほか旧一円券（現在も有効）、旧十円券、旧百円券（いずれも1885年<明治18年>発行）があり、図柄に商売や農業の神様である大黒天の座像が描かれているところから、こう呼ばれています。

（注）大黒札は、偽造防止のため青色インクを利用していましたが、化学反応を起こしやすい原料（鉛白）が含まれていたため、温泉地等では硫化水素と化学反応を起こして黒色に変化し、かえって偽造が容易になったほか、紙質強化を目的としてこんにゃく粉を混ぜていたためねずみや虫の被害が多発したと言われています。

分銅五円

大黒札（旧一円券）

次は、旧五円券と同様の理由から「旧百円券」を改造して発行（1891年<明治24年>）された「改造百円券（藤原鎌足（ふじわらのかまたり）像）」です。このお札は、「メガネ百円」、「メガネ札」、「メガネ鎌足」などと呼ばれています。その理由は、表面の周囲地紋の形がメガネに似ているためです。「メガネ鎌足」は、その後改刷され「甲百円券（藤原鎌足像）」として発行（1900年<明治33年>）されましたが、このお札の裏面に紫色が多用されていることから、「むらさき百円」、「裏むらさき百円」、「むらさき」などという通称で親しまれています。なお、「メガネ百円」は、日本銀行券の中で最も大きいお札です（縦130mm×横210mm）。

メガネ百円

むらさき

お札はあるのですか？

で親しまれている日本銀行券 ―

最後は、「表猪（おもていのしし）」、「裏猪（うらいのしし）」と呼ばれるお札です。「表猪」は、「旧十円券」を改造（理由は前述と同様）して発行された「改造十円券（和気清麻呂（わけのきよまろ）像）」で、１８９０年（明治２３年）に発行されました。このお札は、表面に８匹の猪が配されていたため、後に「表猪」と呼ばれるようになりました。一方、「裏猪」は、「表猪」を改刷して発行（１８９９年<明治３２年>）された「甲十円券（和気清麻呂像）」で、裏面中央に１匹の猪が描かれていたため「裏猪」（または単に「いのしし」）と呼ばれるようになりました。

ちなみに、『続日本紀』によれば、時の称徳（しょうとく）天皇に代わり弓削道鏡（ゆげのどうきょう）が皇位を継承しようとした際、和気清麻呂がこの企てを阻止し、これに立腹した道鏡が手先を遣って清麻呂を暗殺しようとした瞬間、猪３００匹が現れ彼を守ったという伝説があります。

表猪

裏猪

コラム

お札で円のローマ字表記を「ＹＥＮ」としているのはなぜ？

１８７２年（明治５年）発行の政府紙幣「明治通宝」のほか、日本銀行券についても、１８８５年（同１８年）の初めての発行以降すべて円は「ＹＥＮ」と表示されています。

「円」を「ＥＮ」ではなく、「ＹＥＮ」と表記している根拠は、はっきりとしていませんが、以下のようなさまざまな見方があります。

（１）発音上の理由

「ＥＮ」は外国人が発音すると「エン」より「イン」に近いものとなるとして、子音Ｙを付けて「ＹＥＮ」としたのではないかとの見方です。ちなみに、幕末日本を訪れた外国人の記録には、「江戸」を英語で「ＹＥＤＯ」と表現したものがあります。

（２）諸外国の語句との区別

「ＥＮ」は、オランダ語では「～と」、「そして」の意、スペイン語、フランス語では「～の中に」の意で頻繁に使用されるため、これらとの混同を回避したとの見方です。

（３）中国の「圓（ユアン）」からの転訛

中国の「元」紙幣は、表に「○圓」、裏に「ＹＵＡＮ」と表示されていました。これが「ＹＥＮ」に転訛したとの見方もあります。